第３章　フリーハンドの総合学習
第５節　地域学習としての総合学習

「地域」をテーマにした総合学習としては、２００２年度「校区のコマーシャル大作戦」、２００６年度「われら校区探検隊」、２０１３年度「吐山を歩こう」(いずれも３年生)と、２０１０年度「地域遺産はやま」(５年生)、２０１１年度「戦争と吐山」(６年生)があります。この節では、２０１０年度・１１年度の実践を取り上げます。

■地域を記録し、遺す■

本稿は、2010 年度と 2011 年度のクラスの記録として 2012 年３月にまとめたものです。

Ⅰ　プロローグ

定年まで６年となった 2010 年春、生まれ育った地元の小学校に異動した。校舎を見下ろす位置に暮らし、徒歩数分という通勤は、これまでの生き方をも変えてしまうほどの出来事だった。地元の気楽さと地域プレッシャーの中で考えたことは、私だからこそできる仕事をしたい。そして、育ててくれた地域に恩返しをしたいということだった。「地域」にこだわった“世界遺産学習”や“平和学習”の原点は、こうした私の個人的事情にあった。

Ⅱ　「地域遺産はやま」

１　はじめに

奈良市では、５年生になると市内にある世界遺産について学習することになっている。数年前に編入合併された私たちの地域は、それら世界遺産から 20km 以上離れており、生活レベルでの親しみはなかった。そこで、世界遺産学習の１つとして、吐山校区の地域遺産を調べることにした。

２　吐山の地域遺産選定にあたって

ユネスコは、世界遺産を「人類が共有すべき顕著な普遍的価値をもつもの」としている。私たちは、「地域遺産」を、「地域みんなの宝物」「今までも、これからも変わらずに大切なもの」と定義した。そして、ユネスコは、世界遺産条約で「文化遺産」と「自然遺産」について、無形文化遺産保護条約で「無形文化遺産」について定めている。私たちも、ユネスコの分類にしたがって、地域遺産を「文化遺産」「無形遺産」「自然遺産」の３つに分けることにした。

さて、ユネスコは、世界遺産条約の中で世界遺産として認められるための条件を決めている。私たちは、それを参考にして、地域遺産にする基準を作った。

１　吐山に住む人たちが大切にしてきた建物や芸術であること。

（文化遺産や無形遺産の基準）

２　とてもめずらしく、大切な自然であること。（自然遺産の基準）

３　その文化や自然を吐山の人たちが守り、次の世代に伝える努力をしていること。（文化遺産・自然遺産共通の基準）

地域遺産登録までの具体的な流れは次の通り。

まず、吐山にある建物や芸能、生き物、植物、自然を出し合い、地域遺産の候補リストを作った。子どもたちからは全部で 13 候補が出された。

次に、本格的に調べるかどうかを決める「調査決定会議」をした。地域遺産の３つの基準をもとに話し合いを重ね、７つについて調べることになった。

いよいよ調査活動である。私から概要説明をして、見学に行く場所やお話を聞く人を決めた。10 人の方に手紙を書いて、インタビューのお願いをした。そして、インタビューする内容を３つ以内にまとめる話し合いをして、準備した。現地調査も７回実施した。

そして最後は、決定会議だ。調査活動の時のメモをもとに地域遺産の基準を満たしているかどうかを話し合い、７つについて登録を決定した。

３　まとめる、のこす、ひろめる

ＤＶＤに収録して地域の人たちに広める。――これが私たちの学習の「ゴール」だ。そこで、プレゼンテーションを作り、録音したナレーションと合成してビデオファイルに仕上げることにした。

プレゼンテーションについては、１つの遺産についてスライドを８枚にした。理由が２つある。１つは、使用する写真を厳選させるため。もう１つは、８枚の中で「話題提示･問題提起」→「説明・解説」→「まとめ・提言」といった論理性のあるストーリーを作るためである。

まず８つの場面を決定し、それぞれの場面で使うナレーションを書かせた。そ

れらをつなぎ合わせ、あるいは補強して仕上げていった。続いて、各自の持ち場を決めてＩＣレコーダーに録音。この時点ではコンピュータ室の整備ができておらず、あとは私の夜の仕事になった。以下にナレーションとスライドを紹介しよう。

4　吐山の文化遺産

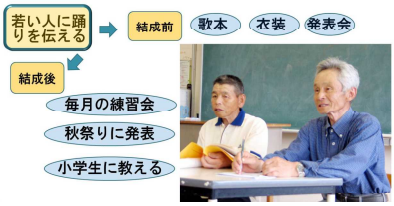
(1) 太鼓踊り

①
吐山の太鼓踊りは、300年の歴史をもつ、県の無形文化財です。無形文化財というのは、形のない文化財ということです。50人以上の人たちによって演じられた時、初めて形を現すのです。
太鼓踊りにはどんな意味があるのか、また、どのようにして現在まで伝えられてきたのか、一緒に見ていきましょう。

②
ふつう「太鼓踊り」とよんでいるものは、2つに分けることができます。
1つは、雨乞いの中で行われる「いさみ踊り」です。田植えや、稲が育つ時期に雨が降らず、日照りが続いた時に、神社に願かけをするのが、雨乞いです。この雨乞いには、神社への砂持ち、池のそうじ、千燈明、一万燈明などがあります。そして、最後の手段として行われたのが、ダケ山の上で火をたき、太鼓をたたく「ダケノボリ」と、山から下りて神社で行われた「いさみ踊り」です。
もう1つは、願がかなって、無事に雨が降った時に、御礼の意味で神社で行われた「太鼓踊り」です。

③
向井さんの家に1693年の歌本が残されていることから、吐山の太鼓踊りには、300年以上の歴史があることが分かります。太鼓の数は、2つの時代や5つの時代があって、100年ほど前から、今の7つになったようです。
63年前の太鼓踊りに参加された、今村さん、向井さん、庄中さんに、若い頃の練習のことをお聞きしました。
昔は、垣内の寺に太鼓が保管されていたので、寺に集まって練習したそうです。他に楽しみのない時代だったので、みんなが集まって、1杯呑んでしゃべり、練習すること自体が楽しかったと、話してくださいました。
太鼓踊りは、いつやるか決まっていない上に、他の村へ出さないように長男にしか教えないきまりがあったため、何度か途絶えてしまう危機に見舞われています。今からおよそ100年前の大正2年に、60年ぶりに本格的に踊った時、60年ほど前の昭和22年、戦後間もなく踊った時、40年ほど前の昭和42年に踊った時が、その危機を乗り越えた時だと、先生が説明してくれました。
しかし、その後、雨乞いの太鼓踊りは一度も行われていません。米作りが主な仕事ではなくなったこと、ポンプを使って水を送るようになって、以前ほど水不足の心配がなくなったことが、主な理由です。

④
今から40年ほど前から、吐山の人たちは、太鼓踊りを若い人たちに伝える取り組みに、力を入れてきました。おどりの歌詞を書いた歌本を発行して、おそろいの衣装を作りました。また、踊りを発表する機会を作って、若い人たちの参加を進めてきました。
そして、20年ほど前に、吐山太鼓踊り保存会が作られました。保存会の目的は、若い人に踊りを伝えることです。そのために、毎月1回の練習会を行い、秋祭りでその成果を発表しています。また、小学生に教える活動も、15年ほど続けられています。



⑤
今年の大人の人たちの練習は、「糸屋踊り」です。
江戸時代には、16もの踊りがあったそうですが、現在残っているのは6つです。6つのうち、「干田踊り」「宝踊り」「鎌倉踊り」の3つはよく踊られてきました。しかし、「松虫踊り」「糸屋踊り」「長崎踊り」は踊られることも少なく、あまり知られていません。去年の「松虫踊り」や今年の「糸屋踊り」は、次の世代に太鼓踊りを伝える取り組みなのです。

⑥
小学校では、総合的な学習の時間を使って、太鼓踊りを教わっています。
「干田踊り」と「宝踊り」を中心に、参観日での発表をめざして練習しています。また、太鼓踊りクラブに入って、秋祭りの発表に参加している人もいます。
最初はとてもむずかしかったけど、練習してたたけるようになってきました。上手になったとほめてもらえると、すごく楽しいです。

⑦
11月23日は、下部神社の秋祭りです。
午後2時30分、恵比寿神社を出発した太鼓が下部神社へ向かいます。境内では、たくさんの人が見学に来ていました。
5つの太鼓が揃うと、太鼓踊りクラブの5・6年生が、打ち込みに続いて「干田踊り」と「宝踊り」を踊りました。そのあと、大人の人たちが「糸屋踊り」を踊り、打ち込みをしながら恵比寿神社へ戻っていきました。

⑧
かつて、太鼓踊りは、吐山のくらしの一部でした。時代の変化とともに、雨乞い踊りとしての太鼓踊りは、その役割を終えました。今、太鼓踊り保存会で取り組まれている活動は、太鼓踊りを伝統文化として次の世代に伝えていくことです。それは、米作りが主な仕事だったころの吐山のくらしを伝えていくことでもあるのです。

(2) 下部神社

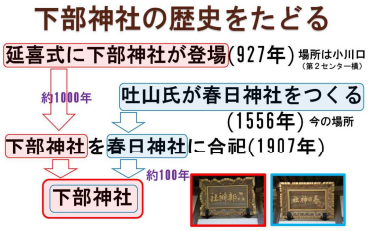
①
下部神社の鳥居には、式内社と書かれています。これは、今から1100年ほど前に延喜式という本に名前が出てくる神社という意味です。ところが、下部神社は元は今の場所にはなかったというのです。古い歴史をもつ下部神社がたどった道を、一緒にたどってみま

・式内社は１１００年の歴史のあかし

しょう。

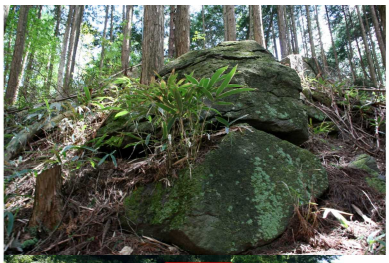
②

下部神社は、1100年ほど前、小川口の野外活動第2センター入口付近に造られました。それが今から450年ほど前に、吐山氏が春日神社を造ったことで、吐山の神社は春日神社になりました。そして今から100年ほど前の1907年、春日神社の場所に下部神社も一緒にまつられることになり、名前も下部神社と変えられました。下部神社が、再び吐山を代表する神社になったのです。



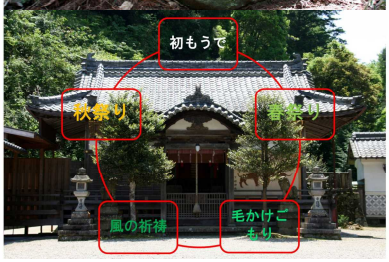
③

昔、下部神社のあった場所には、「下部神社址」の石碑が建っています。その後ろは山になっています。左の方に少し登っていくと、大きな石があります。これは、イワクラと言って、神様の石なのだそうです。



④

下部神社では、1月1日の初もうで、4月29日の春祭り、6月11日の毛かけごもり、8月25日の風の祈祷、11月23日の秋祭りなど、たくさんの行事が行われています。また、お宮参りに来る人もいます。

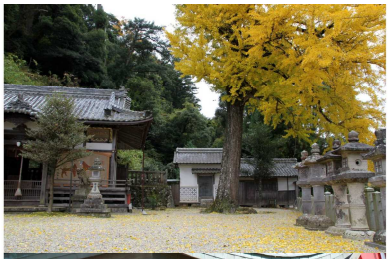


⑤

神社の社守をしておられる東さんです。3人の氏子総代の人と一緒に、神社の行事をしたり、掃除をしたりします。また、毎月19日には、老人会の人たちが境内の掃除をされているそうです。

⑥

下部神社の境内には、大きないちょうの木があります。黄色に色づく秋になると、遠くから写真を撮りに来る人もいます。白い砂の上に落ちたいちょうも、とてもきれいです。東さんに聞くと、いちょうの樹齢は300年くらいだということでした。



⑦

下部神社では、20年に1度、大修理が行われます。これを「ぞうく」と言って、吐山の人たちがお金を出し合って行います。最近では、2006年に行われました。本殿がきれいにぬられ、社務所が新しくなりました。神社をみんなで守っていく仕組みが分かりました。

⑧

かつては、吐山の人たちの米作りを中心にしたくらしと、神社の行事が深く結びついていました。今は、会社などに勤めている人が多いので、神社は昔ほど身近なものではなくなりました。行事の日をみんなが参加しやすい日に変えるなど、工夫しているそうです。

吐山の人たちの1000年以上続いたくらしを伝える施設として、下部神社を守っていってほしいと思います。

(3) 春祭り

①
4月29日、吐山では春祭りが行われます。祭りのハイライトは、時代行列のお渡りです。ところが、そのお渡りには、あまり知られていない秘密が隠されていたのです。一体どんな秘密があるのでしょうか。
②
午後1時30分、お渡りの行列が下部神社を出発します。行列は、杖と金棒を持った「警固」を先頭に、幡を持った「神号」、4人の「御幣」、「神職」と続きます。子どもの姿が見えますが、「神子」と言います。

③
「槍」と「長刀」のあと、「式士」の5人が続きます。貴族のようにも見えますが、刀を差しています。その後ろは、鎧甲を着けた「具足」です。このおじさんは、「重い。代わったろ。」と言っていました。昔の武士はこれで戦争をしたのですから、大変だったでしょう。そして、「御田子」という小さい子が、お父さんたちと一緒に歩きます。最後に、赤い服を着た「射手乳子」という小学生と「警固」が行きます。行列は、学校の近くの道を1周半回って終わりです。
④
ところが、春祭りのメインは、このあと下部神社と恵比寿神社の境内で行われる行事だったのです。
まず、社守の東さんが、「伊勢の山の御田打つ男、しがらみのかさきて、植えようじょ、植えようじょ」と言います。
⑤
そうすると、くわと代かきの道具を持った5人の「式士」が田を耕し、平らにする仕草をします。その時、「具足」は太鼓を、「射手乳子」は鐘を打ち鳴らします。

⑥
そのあと、「御田子」が杉の葉を投げて、田植えのまねをします。
これらの動作を3回繰り返します。
これを「御田祭」と言い、豊作をお祈りする行事なのです。

⑦
御田祭のあと、「射手乳子」による的打ちがあります。田んぼのあぜに立てた的板を、弓矢で打ち割るのです。板の割れ方で豊作かどうかを占ったのでしょうか。それとも、わざわいを打ち割るおまじないだったのでしょうか。
このように、春祭りは、田植え前の豊作を願うお祭りだったのです。

春祭りは田植えの祭り

・豊作を願う恵比寿神社のお祭り

お渡りの行列　①

お渡りの行列　②

春祭りのメイン　御田祭　①

春祭りのメイン　御田祭　②

春祭りのメイン　御田祭　③

射手乳子による的打ち